

県道高松志度線道路改良事業に伴う

埋蔵文化財発掘調査概報

小山・南谷遺跡

平成5年度



1994. 3

香川県埋蔵文化財研究会

例　　言

1. 本書は、県道高松志度線道路改良事業に伴い平成5年度に実施した小山・南谷遺跡の発掘調査の概要を記録したものである。
2. 本調査は、香川県土木部道路建設課からの依頼をうけ、香川県教育委員会が調査主体となり、財団法人香川県埋蔵文化財調査センターが調査担当者として実施した。
3. 本年度の調査組織は、次のとおりである。

総括	所長	松本 豊胤
	次長	真鍋 隆幸
総務	係長	土井 茂樹
	係長	今田 修 (平成5年5月31日まで)
	係長	上林 和明 (平成5年6月 1日から)
	主査	大西 健司
調査	文化財専門員	西村 尋文
	文化財専門員	中川 労和
	文化財専門員	片桐 孝浩
	調査技術員	石井 健一

4. 調査にあたっては、次の機関や方々の協力を得た。記して謝意を表したい。
香川県土木部道路建設課、香川県高松土木事務所、南谷自治会、唐戸池水利組合
5. 本書の執筆は調査担当者が分担して行い、編集は片桐が行った。
6. 本書で使用した遺構略号は、次のとおりである。
S H…竪穴住居 S K…土坑 S D…溝 S B…掘立柱建物
7. 挿図の一部は、国土地理院地形図(1/25,000)を使用した。

本文目次

1. 調査の経緯と経過	(西村)	1
2. 遺跡の立地と環境	(中川)	2
3. 調査成果の概要	(片桐)	4
4. 遺構・遺物について	(片桐)	4
5.まとめ	(片桐)	17

挿図目次

第1図 小山・南谷遺跡調査区割図	1
第2図 周辺遺跡位置図(1/25,000)	3
第3図 Ⅰ区遺構配置図	5~6
第4図 I・Ⅱ区遺構配置図	7
第5図 土坑平・断面図	8
第6図 SK58出土遺物実測図	9
第7図 SH02出土遺物実測図	10
第8図 SH02平・断面図	11
第9図 SH03平・断面図	12
第10図 SH03出土遺物実測図	13
第11図 SH08平面図	14
第12図 SH08出土遺物実測図	15
第13図 SH19出土遺物実測図	16
第14図 SH19平面図	16

写真1 Ⅰ区西部遺構検出状況

写真6 SH03上層遺物出土状況

写真2 Ⅰ区中央部遺構検出状況

写真7 SH03完掘状況

写真3 Ⅰ区東部遺構検出状況

写真8 SH08完掘状況

写真4 SH12・13完掘状況

写真9 SH19完掘状況

写真5 SH02完掘状況

1. 調査の経緯と経過

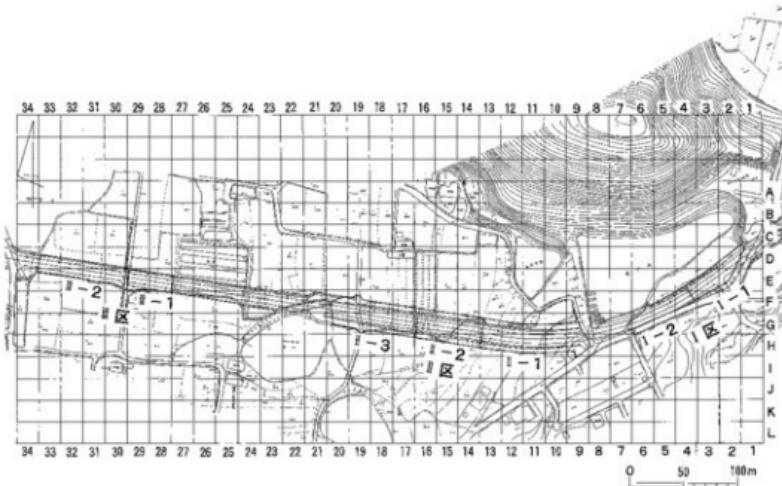
平成4年香川県教育委員会は、県道高松志度線の工事区域の内、高松市新田町より高松町区间の試掘調査を実施した。その結果、新田町小山、高松町南谷において、10,000m²の範囲で保護措置の必要な区間が新規に確認された。

その試掘結果に基づき香川県教育委員会は、香川県埋蔵文化財調査センター（以下センターと略称）及び香川県土木部道路建設課と協議を進め、平成5年度にセンターが事前調査を実施する点で合意し、平成5年4月1日付けでセンターとの間で「埋蔵文化財委託契約書」を締結し、本年度中にセンターが調査を実施することになった。

現地調査は平成5年4月22日より開始され、平成6年3月18日に終了した。また、本調査では機械掘削及び人力掘削を、土木業者に請け負わせる工事請負方式で実施した。

調査区は東より西に向けてI～II区に区分し、道路工事との関係でI区からII区に向けて調査を進めた。4月中は仮設工事、5月末よりI区から掘削作業を開始した。なお、II区からは当初予想していたとおり、良好な一括資料を伴う弥生時代後期の竪穴住居跡群が検出され、本調査の主体を占めることになった。また、II区からは当初予測されなかった、縄文時代後期の落し穴群が検出された。縄文期の落し穴の資料は、県下でも類例が極端に少なく大変貴重な資料となった。

4月より開始した本調査も、翌年の2月中には発掘調査を完了し、3月は基礎整理、仮設備の撤去等を実施し現地調査を完了した。



第1図 小山・南谷遺跡調査区割図

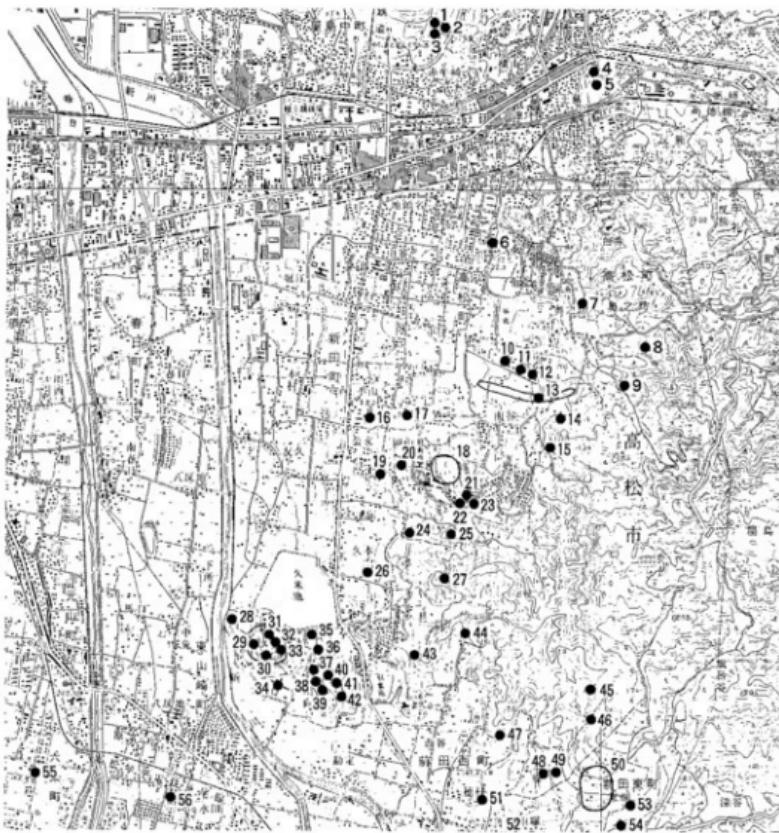
2. 遺跡の立地と環境

小山・南谷遺跡の調査区は高松市新田町小山から高松町南谷に至る、東西方向延べ約1,450mの範囲に設定した。遺跡西部は高松平野の北東部辺縁、また東部は立石山を中心とする山塊から北西に派生する低丘陵に挟まれた谷部に相当し、周辺に複数の溜め池を伴う田園の中を東から西へ緩やかに下る。現地表の標高は、遺跡東端の唐戸池南において約39m、中央部の長尾池南端付近は19～20m、西端の主要地方道塩江屋島西線（通称新田街道）沿道は6m前後である。

新田・高松両町の北部は、江戸時代初期に干拓により陸地化されたものである。寛永10（1633）年の『讃岐国絵図』によると、その頃の海岸線はかなり内陸へ入り込んでおり、屋島は島として描かれている。北を屋島に面した沿岸（旧地形による）、東を立石山の山塊、南を久米山丘陵、西を新川によっておおむね限られる高松平野の一角は、古代・中世を通じて「高松」（讃岐国山田郡高松郷）と呼ばれたが、天正16（1588）年の生駒親正による高松城築城以後は、城下高松に対して「古高松」と呼称されてきた。江戸時代以前の古高松の地形が推定可能な史料として、香西成資が享保4（1719）年に成立させた『南海通記』がある。その中に天正10（1582）年頃の地形として「……、入海ニテ山田郡小山ノ下マデ潮サシ来ル、……」（巻之十五）との記述があることから、新田町の小山近辺まで海岸線あるいは河口が湾状に入り込んでいたとみて差し支えないと思われる。さらに現在の地形・標高や、条里地割の名残の有無、遺跡の分布等から勘案すると、近世以前には久米池付近まで満潮時には潮が差し込んでいたという想定も可能であろう。

本遺跡の周辺には、主に弥生時代から古墳時代にかけての遺跡が存在する。これらは特に、東部の山麓ないし丘陵地一帯と南部の丘陵地に集中している。弥生時代の遺跡としては、これまで古高松近辺では最古とされていた久米池南遺跡（中期末～後期初頭）、大空、スペリ山南、南谷の各遺跡（いずれも後期前半）がある。中でも、昭和29（1954）年に地元の小学生3名による土器採取が契機となって確認された大空遺跡は、北四国における弥生時代後期前半の標識遺跡として知られる。多種にわたる弥生土器64点（内完形が40余点）が单一土坑から一括出土したものであるが、とりわけ17点の製塩土器が目を引いた。この製塩土器は本遺跡直近の南谷遺跡でも多量に採取されたが、これらのこととは上述した海岸線の入り込みや、製塩に伴う大量の燃料（木材）の必要性を考え合わせると、付近に土器製塩活動を行う集落が存在することが十分に予想され得るものである。

古墳時代に下ると、前期の高松市茶臼山古墳をはじめとして、小山、久本、山下等の後期古墳（群）の分布が顕著となる。高松平野東縁部の古墳の集中は、西方の石清尾山古墳群と並んで際立っており、この地域を統括・支配した有力な首長の存在を裏付けるものである。



第2図 周辺遺跡位置図(1/25,000)

1 湯の谷2号古墳	15 南谷遺跡	29 久米山6号墳	43 北山古墳跡
2 湯の谷1号古墳	16 小山古墳	30 久米山5号墳	44 遷本神社古墳
3 湯の谷3号古墳	17 石塚古墳	31 久米山2号墳	45 金石山1号古墳
4 綾原古墳	18 冈山小古墳群	32 久米山4号墳	46 金石山2号古墳
5 神柳王墓	19 山下庵寺	33 久米山1号墳	47 田楽古墳
6 西岡城跡	20 山下古墳	34 川添浄水場遺跡	48 平尾2号古墳
7 奥之坊古墳	21 冈山1号古墳	35 佛生山古墳	49 平尾1号古墳
8 大空遺跡	22 冈山3号古墳	36 久米池南遺跡	50 平尾小古墳群
9 スベリ山南遺跡	23 冈山2号古墳	37 西茶臼山2号古墳	51 前田城跡
10 長尾2号古墳	24 丸山古墳	38 西茶臼山1号古墳	52 前田麻寺(宝篋印塔?山下塚原古墳より)
11 長尾1号古墳	25 大谷山古墳	39 高松茶臼山西古墳	53 山本古墳
12 長尾3号古墳	26 久本古墳	40 高松市茶臼山古墳	54 潤溝塚古墳
13 小山・南谷遺跡	27 久本山東峯古墳	41 高松茶臼山東古墳	55 六条上所遺跡
14 南谷古墳	28 諏訪神社遺跡	42 高松茶臼山南古墳	56 東山崎・水田遺跡

3. 調査成果の概要

小山・南谷遺跡は高松市高松町1057番地他に所在し、地形的には立石山山塊から北西に派生する丘陵に挟まれた谷状地形の斜面部に位置する。調査区は東西に長く、Ⅰ区は谷状地形の最奥部・立石山山塊の北西裾部に、Ⅱ区は谷状地形の中央に、Ⅲ区は谷状地形の先端部に設定した（第1図）。

Ⅰ区では弥生時代と中世の柱穴などの遺構を検出した（第4図）。当調査区が山裾で、低丘陵の縁ということもあり、遺構は希薄であった。

Ⅱ区では縄文時代の落し穴状の土坑が14基と弥生時代の竪穴住居19棟・土坑74基・土壙墓4基・溝71条・柱穴多数を検出した（第3図）。

縄文時代の土坑はⅡ区（G-15・16）において検出した（第3図）。これらの土坑は立石山山塊から北西に派生する低丘陵上の先端に近い頂部に位置しており、その分布は大きく2地区（A地区・B地区）に集中する。A地区では低丘陵頂部から両側の谷部に向かっての延びる土坑列が2列検出されており、ちょうど低丘陵を区切るように配置されている。また、B地区は低丘陵頂部にあたり、その配列には直線的に並ぶもの（SK55-58-59, SK58-98-99）がみられる。

弥生時代の遺構は東部で竪穴住居・土坑・土壙墓・掘立柱建物・柱穴などを中心として、西部で多数の溝と竪穴住居・掘立柱建物を検出した。竪穴住居には円形のものと方形のものがあり、円形の竪穴住居は直径約5～8mで、方形の竪穴住居は一辺約2～4mを計る。東部で検出した溝は丘陵を横切るように、ほぼ同方向を呈している。西部で検出した溝はクランク状に曲げられており、その付近では竪穴住居・掘立柱建物を検出した。また、Ⅱ区西端で集落を区切るような天幅11.4m、深さ1.26mの溝を検出している。この溝が弥生時代後期（鬼川市Ⅱ式併行期）の集落の西限と考えると、集落の東西幅約250mを計るようである。

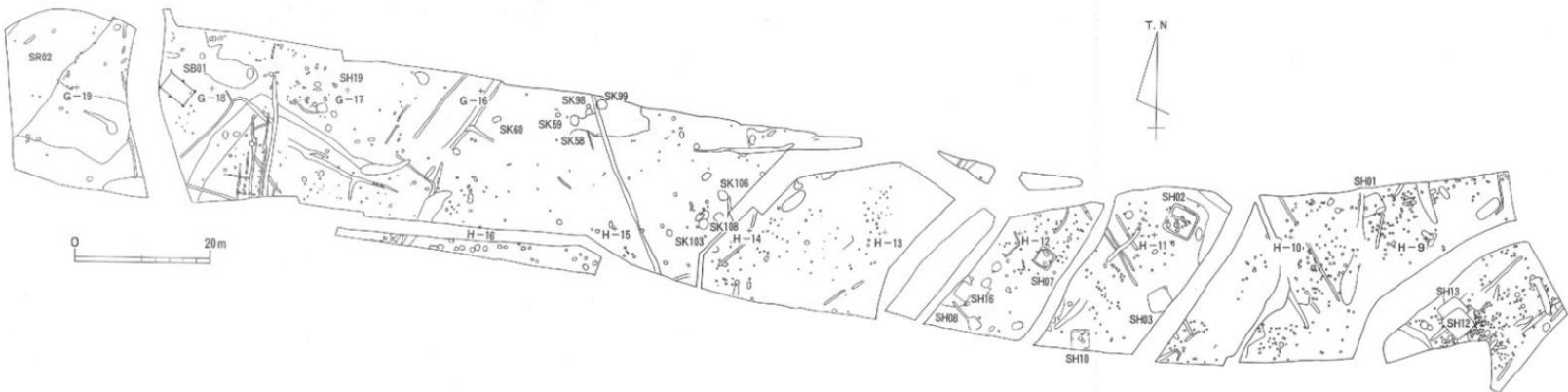
Ⅲ区では弥生時代の土坑・自然河川を中心として検出した（第4図）。遺構はあまり確認されていない。

以上のように検出された遺構は縄文時代・弥生時代・中世のものであるが、弥生時代後期前半の時期の遺構によって、その主体は占められている。

4. 遺構・遺物について

縄文時代

当遺跡で検出した縄文時代の土坑は平面形態及び下部施設などの特徴より4種類（I～IV型）に大別できる。



第3図 II区造構配図



写真1 II区西部造構検出状況



写真2 II区中央部造構検出状況



写真3 II区東部造構検出状況

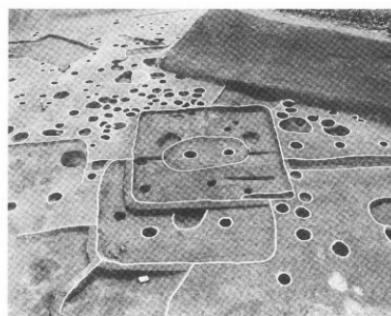
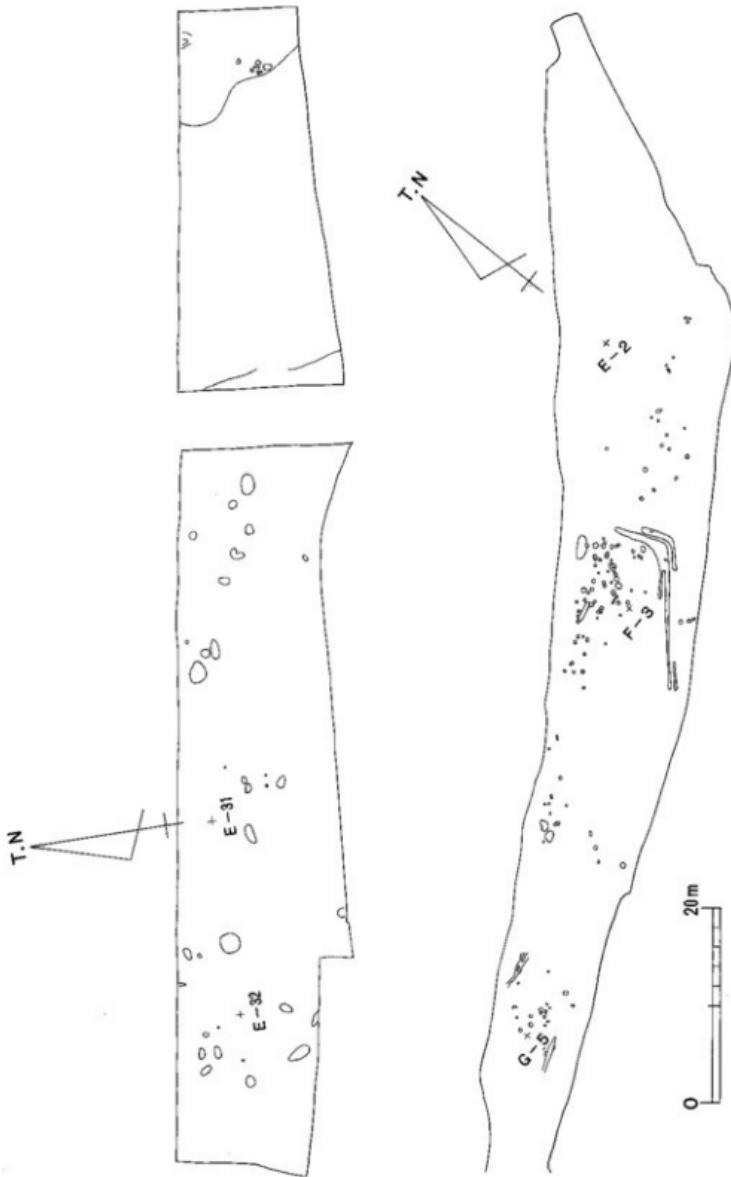
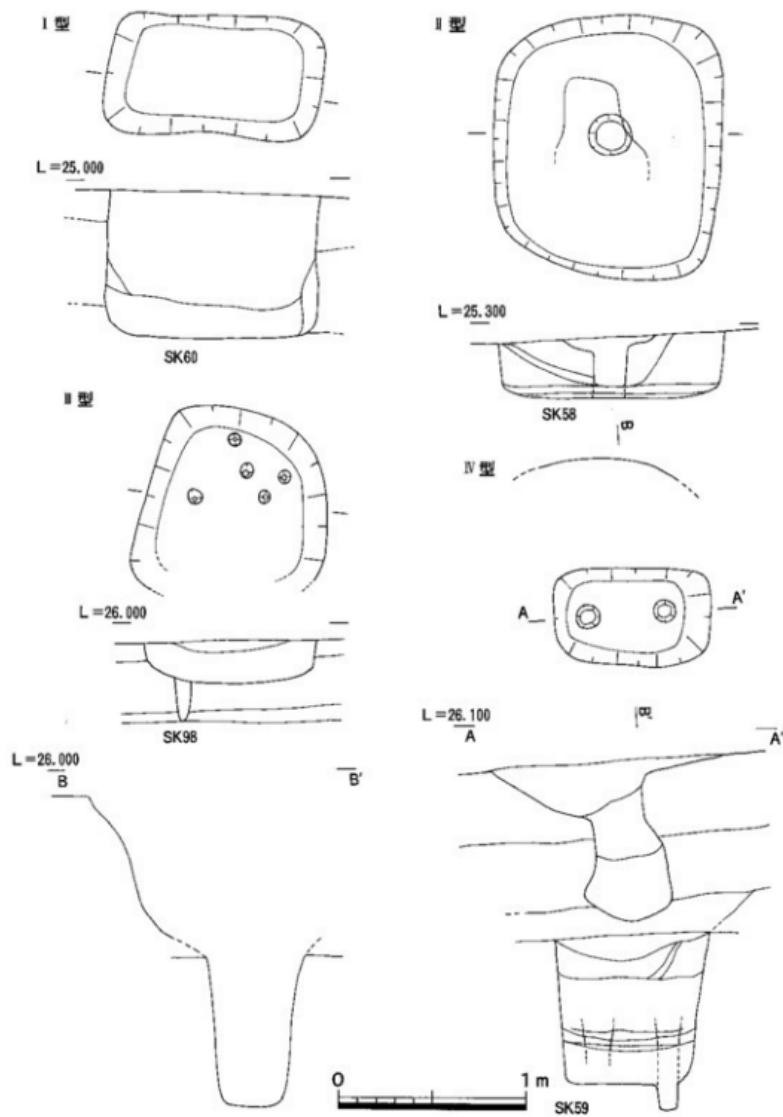


写真4 SH12・13完掘状況

第4圖 I-I'區勘探剖面圖





第5図 土坑・平断面図

I型は平面形および底面形が長方形を呈し、箱型の掘り方をもつものである。下部施設がなく、当遺跡で検出された土坑ではSK60が該当する。

SK60(第5図)

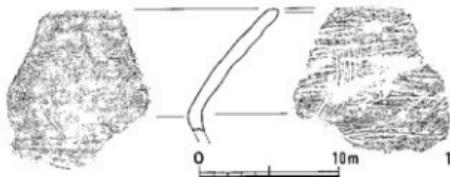
SK60は平面形が長方形を呈するもので、規模は長辺1.15m、短辺0.62m、深さ0.77mを計る。ほぼ垂直な掘り方を持ち、底面形も平面とほぼ同形態・同規模を呈する。下部施設はない。土坑内の堆積土は上下2層に分けられ、上層は淡茶黄色砂混じり粘質土で周辺地山層と近似する。下層は淡灰青色を呈するが質的には上層と同じである。

土坑内より遺物は出土していない。

II型は平面形および底面形が隅丸方形を呈し、箱型の掘り方を持つものである。下部施設として底面ほぼ中央に1個の柱穴を持つものである。当遺跡で検出された土坑ではSK58・99・103・105・106が該当する。

SK58(第5図)

SK58は平面形が隅丸方形を呈するもので、規模は一辺1.22~1.39m、



第6図 SK58出土遺物実測図

深さ0.33mを計るもので上半部が削平されているために浅い。ほぼ垂直な掘り方を持ち、底面形も平面とほぼ同形態・同規模を呈する。土坑底面にはほぼ中央に柱穴が1個検出されている。土坑内の堆積土は青灰色を呈する粘土層と砂質土層が交互に突き固められた状態で検出された。

土坑内より縄文土器が出土している(第6図)。1は深鉢である。「く」の字に屈曲する頸部からほぼ直線的に外上方に延び、口縁部に至る。口縁部外面には貝殻条痕のうち、湾曲する櫛描文が施されている。体部部分が少し残っており、櫛描文が体部にも施されていたことが窺える。内面には横方向の指なしが施されている。

時期は縄文時代後期前半(彦崎I式、永井II式期)である。

III型は平面形および底面形がほぼ隅丸方形を呈し、掘り方は「U」字型を呈する。下部施設として土坑底面に数個の杭痕を持つ。当遺跡で検出された土坑ではSK98が該当する。

SK98(第5図)

SK98は平面形が隅丸方形を呈するもので、規模は一辺0.95m、深さ0.23mを計る。「U」字型を呈する掘り方を持ち、土坑底面には5個の杭痕が確認されている。杭の深さは0.22mを計る。土坑内の堆積土は茶灰色粘質土層で周辺地山層とほぼ近似する。

土坑内より縄文土器片が出土している。時期は縄文時代後期である。

IV型は平面形が円形あるいは楕円形を呈するもので、掘り方は摺り鉢状を呈する。土坑底面に柱穴2個が認められる下部施設を持つ。当遺跡で検出された土坑ではSK59が該当する。

SK 59 (第5図)

SK 59は平面形が円形あるいは橢円形を呈するもので、規模は深さ0.86mを計る。掘り方は摺り鉢状を呈するようである。土坑底面には長辺0.83m、短辺0.52m、深さ0.80mを計り、平面形が長方形で2個の柱穴を持つ下部施設がある。土坑内の堆積土は上下2層に分けられる。上層は土坑内に堆積しているもので濁茶白色砂質土層である。下層は下部施設に堆積しているものでSK 58と同様に青灰色の粘土層と砂質土層の互層である。

土坑内下層（下部施設）より縄文土器片が出土している。時期は縄文時代後期である。

弥生時代

II区で検出された竪穴住居は平面形が方形のものと円形のものがある。その数は方形が17棟、円形が2棟である。方形のものは全て小型で2本の主柱穴を持つという特徴がある。

SH 02 (第8図)

SH 02はII区東部（G-11）で検出された。

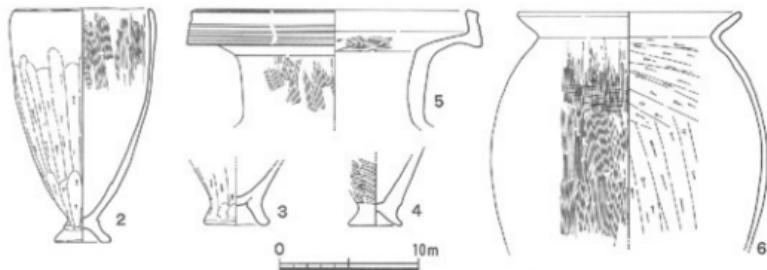
平面形態は東西4.18m、南北4.56mの隅丸方形を呈する竪穴住居である。検出遺構面から床面までは深さ0.26mを計る。主軸は、真北より約28°東偏している。内部構造は周囲に壁溝が認められる。ほぼ中央部に長方形を呈する炉跡があり、その回りを溝が廻るようである。一部ではあるが炉と溝の間に3cm程度の高まりがみられることから炉の廻りに土手状のものが廻っていたものと思われる。



写真5 SH 02完掘状況

主柱穴はその炉の短辺側に接するように2穴検出

されている。また、炉南部に土手状の高まりと溝を廻らせた2段掘の土坑が検出されている。南西隅で検出された土坑は貯蔵穴と思われる。



第7図 SH 02出土遺物実測図

竪穴住居内から多数の遺物が検出されている。

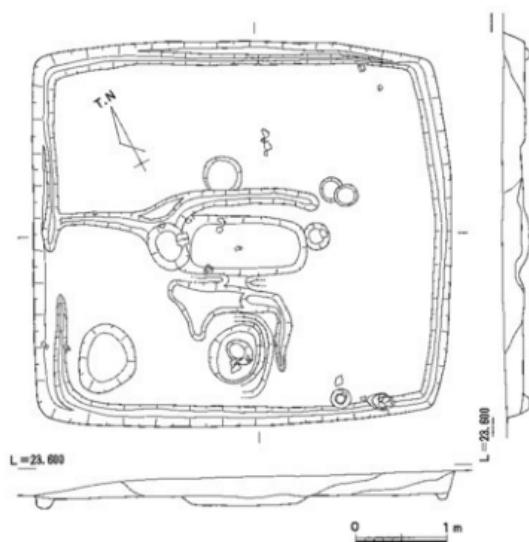
2~6は床面直上出土の遺物である(第7図)。

2~4は製塙土器である。2は「八」字に開く脚部から体部は内彎気味に上方に延びる。体部外面には脚部屈曲部から上方に向けてのヘラ削りが施され、上半部は指なでされている。体部内面には上半部に上下方向の刷毛目が施されている。胎土に角閃石・金雲母を含み、チョコレート色を呈していることから所謂「下川津B類」の範疇に入るものと考えられる。4は「八」字に開く脚部から体部はほぼ直線的に外上方に延びる。体部外面に右下がりの叩き痕が施されている。5は壺である。ほぼ垂直に立ち上がる頸部を持ち、口縁部は水平に開き、上方に延びる所謂二重口縁を持つ。口縁部外面及び上面に退化凹線が認められる。頸部内外面には刷毛目が施されている。6は甕である。内彎する体部から「く」字に頸部は屈曲し、口縁部はほぼ直線的に外方に延びる。体部最大径がやや上方にある。体部外面には叩きののち細かい刷毛目が、内面には頸部屈曲部までヘラ削りが施されている。

SH03(第9図)

SH03はⅡ区東部(H-11)で検出された。平面形態は隅丸方形を呈し、東西3.22m、南北2.96mを計る小型の竪穴住居である。検出構面から床面までは深さ0.34mを計る。主軸は、真北より約23°西偏している。内部構造は中央やや西側に炉跡が、東側に小さい段差がみられる。主柱穴は東西壁際に2穴検出されている。一部に壁溝が認められるが全周にあったものかは不明である。この竪穴住居の堆積土は大別して上下2層に分けられる。下層は周辺地山層と近似し、上層は黒色粘質土である。この上層は下層堆積後の壅みに堆積したもので、一括廃棄された土器が多量に出土している。

竪穴住居上層及び下層から遺物が出土している。

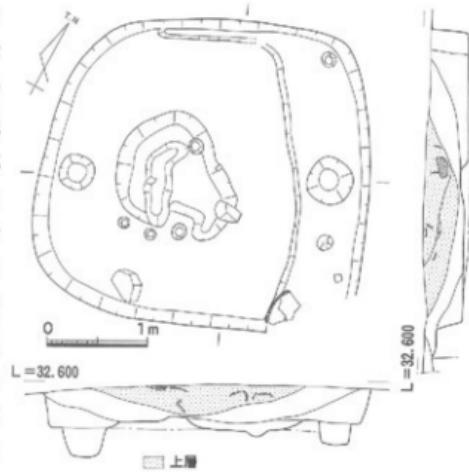


第8図 SH02平・断面図

7は下層出土の遺物で、8～16は上層出土の遺物である。

7～9は製塙土器である。7は内彎する口縁部から体部は直線的に延びる。体部外面に下方からのヘラ削りが施され、上半部は指なでされている。体部内面には刷毛目のち指なでが施されている。8は「ハ」の字に開く脚部から体部は直線的に上方に延び、口縁部は内彎する。体部および脚部外面には下方からのヘラ削りが施され、口縁部外面には横方向のヘラ削りが施されている。体部内面には指なでが施されている。9は直線的に上方に延びる体部から口縁部は「く」の字に内方に屈曲する。体部外面には叩きののち下方から上方へのヘラ削りが施されている。10は壺である。ほぼ直立する頸部から「く」の字に口縁部は開く。口縁端部は上下に拡張されており、上面に退化凹線が認められる。外面には縦方向の指なでが施され、体部内面にはヘラ削りが施されている。11～14は甕である。頸部は「く」の字に外反し口縁部は上下に拡張させるもの（12・13・14）と下方のみのもの（11）がある。体部外面には刷毛目が施され、内面には頸部付近までヘラ削りが施されている。15・16は高环である。15は口縁部で屈曲するもので、端部は左右に拡張する。上面には凹線が施される。脚部には上半3方向、下半3方向の穿孔が認められる。

坏部内外面には分割のヘラ磨きが、脚



第9図 SH03平・断面図



写真6 SH03上層遺物出土状況

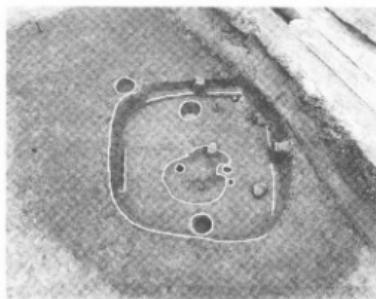
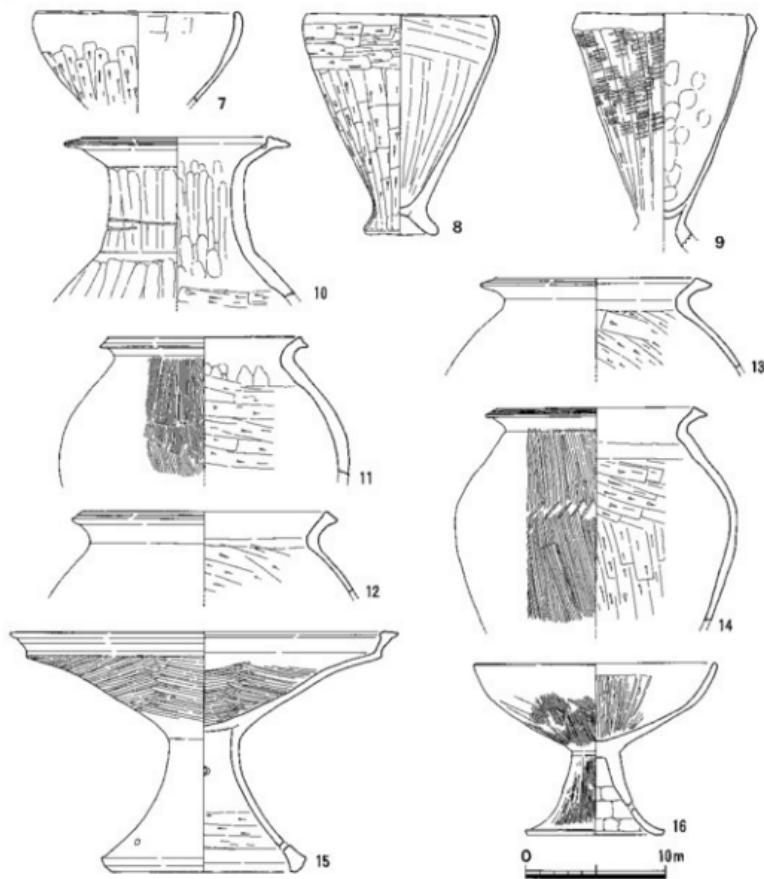


写真7 SH03完掘状況



第10図 SH03出土遺物実測図

部内面にはヘラ削りが施されている。それ以外は指なでされている。16は壊部が内巻する高壺である。内外面に細かい刷毛目が施されている。

SH08 (第11図)

SH08はⅡ区ほぼ中央部(H-13)で検出された竪穴住居である。北西部を後世の水田開発により破壊されているが、平面形態は約直径5.26mの円形を呈するものである。検出構面から床面までは深さ0.40mを計る。内部構造は周囲に壁溝がみられ、ほぼ中央部に長方形の炉跡が認められる。主柱穴は4穴である。

竪穴住居埋土より多數の遺物が出土している（第12図）。

17・20は製塩土器である。「八」の字に聞く脚部から体部下半は直線的に、上半は内彎しながら上方に延びる。体部外面には下方から上方に向かうヘラ削りが施され、上半は指なでされている。内面は指なでされている。脚部外面には指頭痕が認められる。21・22は壺である。ほぼ直立する頸部から口縁は水平に延び、口縁端部に至る。体部外面には刷毛目が、内面には上半に指なでが、下半にヘラ削りが施され

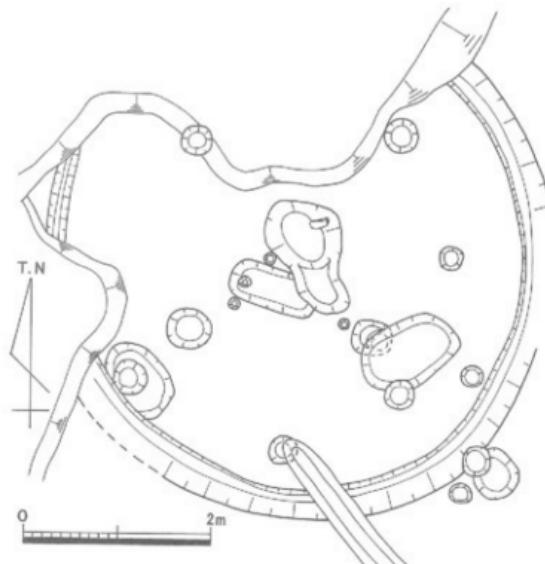
ている。23・24は甕である。「く」の字に屈曲する頸部から口縁部に至り、口縁端部はあまり拡張しない。体部外面に刷毛目が施され、内面には頸部付近までヘラ削りが施されている。

S H 1 9 (第14図)

S H 1 9 はⅡ区西部 (F-18, G-18) で検出された竪穴住居である。かなり削平を受けているが平面形態は直径8.14mを計る円形を呈する。内部構造は



写真8 S H 08挖掘状況

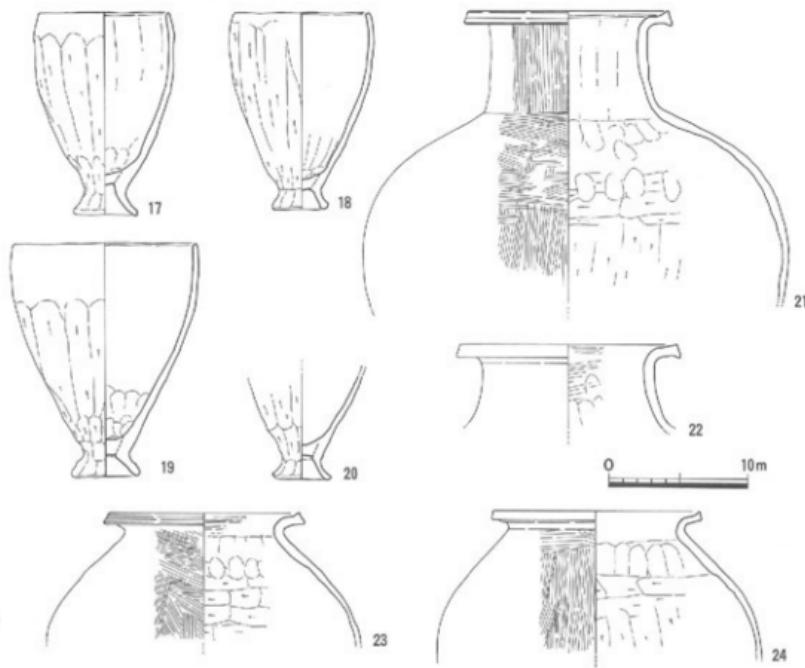


第11図 S H 08平面図

一部に壁溝が、ほぼ中央部に円形の炉痕と灰を入れたものであろうか長方形の土坑が接して検出されている。主柱穴は6穴である。

この竪穴住居より遺物が少量出土している（第13図）。

25・26は製塩土器である。「八」の字に聞く脚部から体部はほぼ直線的に外上方に延び、口縁部で内彎する。体部外面には下方から上方へのヘラ削りが施され、内面には刷毛目が施されてい



第12図 SH08出土遺物実測図

る。脚部外面には指頭痕が認められる。27は壺である。やや内傾する頭部を持ち、外方に屈曲する口縁部を持つ。口縁端部は上下に丸く拡張させ、外面に凹線が施されている。頭部及び体部外面に刷毛目が施されている。体部内面にはヘラ削りが施されている。

S B 0 1 (第3図)

S B 0 1 はⅡ区西部 (F-19, G-19) で検出された梁間 1 間 × 衍行 2 間 ($2.8m \times 4.64m$) の掘立柱建物である。柱穴は円形で平均径約 27cm を計り、柱間は梁間で平均長 2.8m、衍行で平均長約 2.3m を計る。主軸は真北より約 40° 東偏している。東側でクランク状に検出された溝と同じ方向であることから、時期は同時期の弥生時代後期 (鬼川市Ⅰ式併行期) である。

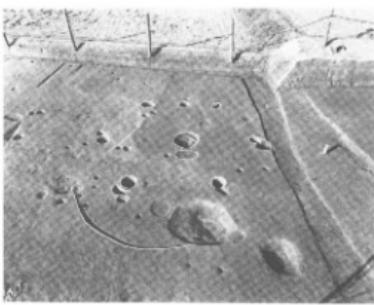
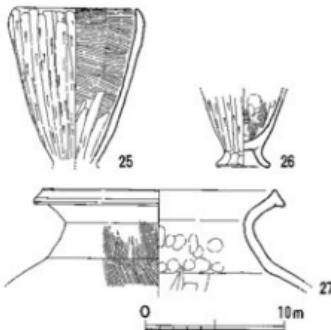


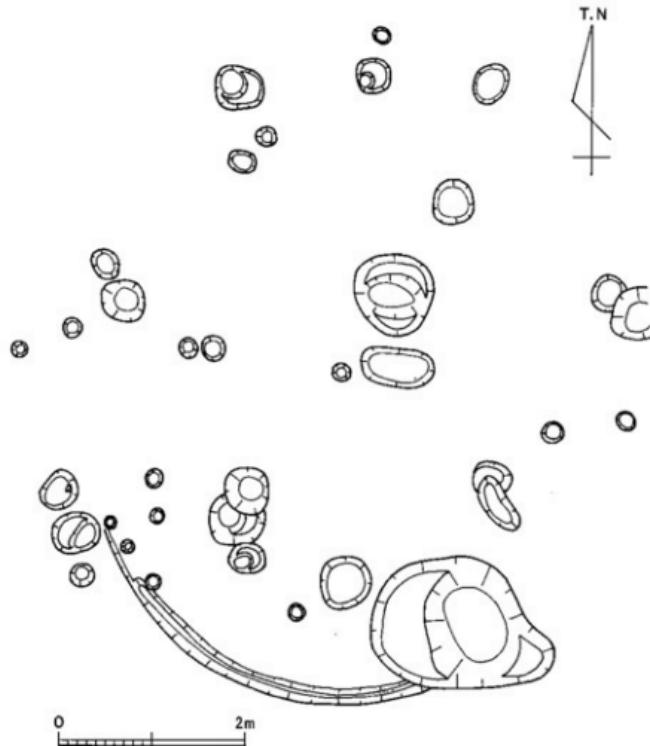
写真9 SH19発掘状況

5.まとめ

縄文時代の落し穴と思われる土坑は主として東日本、特に関東を中心として多数検出されており、西日本には関東ほどは検出例がないのが現状である。西日本でも落し穴は山陰地方に集中しており、その他の地域ではあまり検出されていない。当遺跡で検出された落し穴は大別して4種類（I～IV型）が確認されている。この4種類は関東や山陰地方で検出された落し穴の形態と同様である。その形態差が時期差なのかあるいは捕獲する獲物の差なのか等の点については不明な部分が多い。また、配



第13図 SH19出土遺物実測図



第14図 SH19平面図

列についても谷部に向かって直線的に並ぶものや丘陵頂部に直線的に並ぶ土坑列が確認されており、獲物の捕獲方法を解明する手掛りになるものと思われる。

当遺跡で検出された落し穴がこれら問題点を解明する一資料になればと考えている。

弥生時代の遺構は竪穴住居・土坑・溝などが多数検出されており、時期も後期前半に限定できるようである。特にこれらの遺構からは製塙土器が多数出土していることから近接して土器製塙を生業にしていた集落の可能性が指摘できる。また、製塙土器の系譜や集落の在り方において、当遺跡東部約650mに位置する大空遺跡との関係が注目される。竪穴住居の構造的にも弥生時代後期前半から小型で2本の主柱穴を採用していることが確認された。また、共伴資料から大型の円形竪穴住居と小型の隅丸方形の竪穴住居がセットで同時期に存在していたことが窺われる。

ここで掲載した竪穴住居出土の資料は今後香川県（高松平野東部）の弥生時代後期の編年上の基準となるものと思われる。

当遺跡において遺構の変遷を考えると小山・南谷遺跡SH03下層（南谷I式）⇒小山・南谷遺跡SH03上層（南谷II式）⇒小山・南谷遺跡SH19（南谷III式）⇒小山・南谷遺跡SH08（南谷IV式）⇒小山・南谷遺跡SH02（南谷V式）となり、南谷I～V式までの時期設定が可能となる。

壺・甕・製塙土器を中心各時期の特徴をみると、壺は口縁部拡張が徐々に小さくなり、外面の凹線も退化し、施されなくなる。肩部最大径も上半部分にあったものが、徐々に下がり、肩部の張りがなくなる。外面は刷毛目調整されていたものがV式では叩きの後刷毛目調整が認められる。内面は全時期を通じて頸部までヘラ削りされている。壺においても口縁端部の拡張が小さくなり、外面の凹線も退化する。V式には二重口縁の甕も出現する。製塙土器ではI式に体部の形態が直線的に外方に延び、口縁部で内彎するものが、IV式より体部から内彎するものが出現する。脚はI式頃より徐々に小さくなる。外面の調整は脚部外面から口縁端部までヘラ削りされているものがII式に脚部外面は指頭痕に変わり、IV式には体部外面だけで口縁部はヘラ削りされなくなる。V式に外面に叩き調整を施すものが出現する。

以上の各時期の特徴から岡山県との併行関係をみると南谷I・II式は鬼川市I式に、南谷III・IV式は鬼川市II式に、南谷V式は鬼川市III式に併行するものと考える。また、香川県内では南谷I式は大空遺跡に、南谷IV式が下川津I式に、南谷V式が下川津II式に併行する。

県道高松志度線道路改良事業に伴う

埋蔵文化財発掘調査概報

小山・南谷遺跡

平成5年度

平成6年3月31日

編集 (財)香川県埋蔵文化財調査センター
発行 香川県 埋蔵文化財研究会
印刷 富士印刷株式会社